

[研究ノート]

## 中国における労働模範の身体表象に関する一考察

高山 陽子

### はじめに

社会主義国は様々な労働者顕彰制度を持つ。労働者大会などの式典において達成度に応じて各種の勲章や証明書が授与されるほか、奨金や賞品も与えられ、その様子は新聞で報じられた。貧しい家に生まれた一介の労働者が労働英雄として表彰されるのは、本人にとっても家族や親族にとっても非常に名誉なことであった。

中国では「英模」という英雄と模範者をあわせたものや、「劳模」という労働模範などがある。これらの人物は新聞や映画、ポスターなどのメディアを通して英雄として全国にその名を知らしめてきた。死後は、しばしばその人物の最盛期を表現した銅像が作られ、筋骨隆々の身体を持つことが一つの定番となっている。

英雄とは立派な行いをした人物や革命の犠牲となった烈士を指し、模範者は確実な成果を挙げた模範労働者を指す。中国共産党は、1930年代から模範労働者の表彰を通して社会主義精神を宣伝してきたが、その制度が定着するのは、延安時代（1935-1947）である。その時期は社会主義リアリズムが普及した時期と重なる。1942年の延安講和にてソ連発祥の社会主義リアリズムが中国に導入され、1976年に文化大革命が終わるまで多くの社会主義リアリズム芸術作品が作られた。ダイナミックなポーズの烈士の銅像は英雄崇拝を表現し、たくましい肉体を持つ労働者の銅像は社会主義精神を表現す

るのに適していた。

新中国成立以降、儒教に由来する烈士という言葉は一貫して烈士あるいは革命烈士と呼ばれ続けるが、労働英雄は模範労働と呼ばれるようになる。労働模範として筆頭に挙がるのは、「工業は大慶に学べ」(工業学大慶)の王進喜(1923-1970)【図1】や「農業は大寨に学べ」(農業学大寨)の陳永貴(1914-1986)である。読み書きが得意ではなかったにも関わらず副総理にまでなり、数奇な運命をたどった陳永貴と異なり、胃ガンのため47歳で死去した王進喜は、繰り返し映画やプロパガンダポスター、連環画(マンガ)などに登場し、彼の記念館(中国語では「紀念」であるが本稿では「記念」と記す)は3回の修復を経て現在に至る。改修の度に施設は拡大し、パノラマやジオラマ、実物模型などの大型の展示品が置かれる。



図1 《工業は大慶に学べ》

労働模範は現在の中国の記念館においてどのように展示されるのか。本稿では、中国の労働英雄顕彰制度をたどりながら、労働模範の身体表象について考察することを試みる。

## 1. 社会主義国における労働者顕彰

労働者顕彰の始まりはソ連のスタハーノフ運動である。1935年8月30日から31日にかけて、ドネツ炭田の炭鉱夫アレクセイ・スタハーノフ（1906-1977）が102トンの採掘量を記録した。これは通常のノルマ14倍以上に値する。分業による生産性向上は、9月10日の『プラウダ』においてスタハーノフ運動と紹介され、石炭産業にとどまらず、自動車産業や鉄道産業などにも広がり、11月14日から17日には全連邦スタハーノフ労働者会議が開催された。会議においてスターリンは、スタハーノフ運動が労働生産性および労働者の文化＝技術水準を向上させるものであることを述べた〔富田1996:188-190〕。

中国でもスタハーノフ運動が取り入れられ、1940年の『新華日報華北版』で以下のように紹介された。

5年前ソ連はスタハーノフ従事者がクレムリンにおいて会議を開催し、スターリンが会議場で歴史的意義について、スタハーノフ運動の絶対的な重要性と将来性について演説した。5年間の成績はスターリンの演説を裏付けるものであった。この5年間、スタハーノフ運動は全国に拡大し、日増しにより多くの労働者と集団農民がこの運動に取り組んだ。スタハーノフの革命実践は、一人が同時に複数の機械を管理するほか、複数の職業を兼ねるなどの新しいスタハーノフ運動を生み出した。

『新華日報華北版』1940年11月23日

長征を経て延安に革命根拠地を置いた中国共産党は、1938年、陝甘寧辺区（延安を中心とする根拠地）【図2】で労働者製造展覧会を開き、協同組合、生産労働、労働模範を奨励・宣伝する運動を始めた。陝甘寧辺区では1937年から1949年までの間、74回の展覧会が開催された。展覧会開催の目的は、生産性の向上、迷信の除去、古い習俗の改善などであった。すでに中



図2 中国地図

国では1910年、南京で開かれた南洋勸業会に20万人が来場したことで博覧会への関心が高まり、利権回復と国内産業振興を目的として1929年に杭州で大規模な西湖博覧会が開催された。この博覧会では辛亥革命に関するパビリオンである革命館が置かれ、孫文の銅像も展示された。回数を重ねるごとに産業振興よりも娯楽を強めていった欧米の博覧会とは反対に、中国の博覧会はもともと政治色の強い特徴を持っていた。

大規模な展覧会は1938年、1939年、1943年、1944年の4回であった。1943年11月の第3回生産展覧会にあわせて行われた第1回労働英雄大会では、全区域の約500人労働英雄・模範生産者のうち185人が表彰された。さらに、呉満有、劉建章、申長林、陳徳発など25人が特等労働英雄として表彰され、獎金が与えられた。

呉満有(1893-1959)は延安時代を代表する労働英雄である。一般的に呉満有の生い立ちは以下のように語られる。陝西省横山県石湾郷の麻地溝村の貧農の家庭に長男として生れ、学校に通うことはなかった。1928年の飢饉で、家族とともに延安棗園にたどり着き、荒地を開墾してかろうじて生き延びた。1935年、陝西省北部で紅軍が土地改革を実施した際に、呉満有は土

地を手に入れた。呉満有は土地を与えてくれた紅軍に大いに感謝しその恩に報いたいと考え、弟の呉満旺を紅軍へ参加させた。自らも子供とともに荒地を開墾し、生活は徐々に改善していった。経済的搾取や政治的迫害がなかった陝甘寧辺区で3年働いた呉満有は生活が十分に安定し、抗日前線支援のために収穫の2割から3割を納税した。1939年の春節にはマントウとモチを政府に送った。1942年、春の耕作調査会議において区長・尹登高は呉満有の先進的な業績を紹介し、「模範的な農村労働英雄」であると称えた。それを伝え聞いた『解放日報』の記者・莫艾（1917-2003）はいくつもの山を越えて呉家棗園に取材に行った。記者が最初に呉満有に出会ったのは49歳の屈強な肉体を持つ寡黙で素朴な人物であった。文字の読み書きはできないが理性的であった。呉家棗園の農民全てが呉満有をいい人であると絶賛した。莫艾が1942年4月30日の『解放日報』に書いた呉満有の記事は大反響を引き起こした。

博覧会に際して労働英雄の表彰式が行われ、表彰者の名前や具体的な式典の様子は新聞で報道された。

冀太区工業生産品展覧会第5日。（中略）24日までに男女24名の労働英雄が大会評議員によって評定された。全区の工業労働英雄の一位には太行生産合作総社皮革工場の韓玉実、全区の農業労働英雄の一位には黎城×村農民の王河羊、全区の婦女労働英雄の一位には黎城×村の女性、趙冬香が選ばれた。そのほか、王福中や裴興業、崔文会など8名が工業労働英雄、趙興茂は農民労働英雄、王乃信は牧畜労働英雄、趙金蓮や董全華ら4名は婦女労働英雄に選ばれた。大会開始後まず、戒副主任が、労働英雄大会の評定の意義と政府の労働英雄に対する希望を話し、その中で特に婦女労働英雄に対して熱烈な敬意を表した。並びに婦女が解放され積極的に生産活動に参加し、積極的に独立した地位と平等を獲得するように述べた。続いて、数千人による拍手喝采と音楽の中、5名の婦女労働英雄が壇上に立つと、晋東南婦総代表の蘇韋によってそれぞれ紹介された。その後、戒副主

任は3名の優勝者に絹製の旗と賞金10元、その他の労働英雄には一律賞金10元を自ら与えた。大会主席者らは一様に彼等を敬い、幾度も、今年の生産は間違いなく増加し、来年の展覧会参加へ向けて準備し、労働英雄になることを互いに囁きあった。

『新華日報華北版』1940年9月29日

労働英雄の数が増えるにつれて、政治宣伝における労働英雄の重要性も増していった。毛沢東は1943年11月29日、労働英雄大会において「組織せよ」という演説の中で、以下のように述べた。

労働英雄、模範生産者の諸君。諸君は人民の指導者であり、諸君活動は非常に成果をあげているが、私は諸君も自己満足しないように希望する。私は諸君が、関中、隴東、三辺、綏徳に戻り、延属の各県に戻り、機関、学校、部隊、工場に戻り、人民を指導し、大衆を指導して、いっそう立派に活動し、よりよく協同組合に組織するよう希望する。

[毛沢東集9 1971:93-94]

陝甘寧辺区は、国民政府が八路軍と新四軍に支払う俸給と国内外からの献金を主要な財政収入としていたが、1941年に皖南事変が勃発すると、外部からの献金が途絶え、財政危機に陥った。中国共産党は軍隊や各機関、学校などへの日用品支給を半減すると同時に、農業生産性向上を目指した農業政策を実施した。生産性向上のため変工や扎工といった農民互助組織が作られた。変工とは、労働力と労働力、畜力と畜力、労働力と畜力の交換を行う組織であり、扎工は土地の少ない農民が労働力を交換または提供する組織である。当時の農民はまだまだ個人経営を好んだため、こうした組織が浸透しなかった。そこで、労働英雄や模範生産者の奨励によって、農業の合理化を進める必要があった[佐藤 1984:11-13]。

1944年9月、陝甘寧辺区政府は「労働英雄と模範労働者の選挙および奨

励方法に関して」を公布し、労働英雄と模範労働者の選出は無記名で行うことを定めた。毛沢東は1945年1月10日の労働英雄模範工作者大会において演説を行い、労働英雄・模範工作者の三つの役割を語った。すなわち、第一は率先的役割、第二は骨幹的役割、第三は橋梁的役割である〔毛沢東集9 1971:157-167〕。

小島が指摘するように〔小島1996:121〕、中国共産党は模範を政治宣伝において積極的に利用してきた。延安時代についていえば、呉満有に関する語りにはある程度の修正はあったものの、共産党や毛沢東に媚びた見解は見られなかった〔今堀1971:3〕。1949年以降、模範はより政治的な存在となり、労働模範として新聞に宣伝された人物は、映画やプロパガンダポスターなどを通して視覚的に広がっていった。

## 2. 労働英雄から労働模範へ

延安時代に博覧会と同時に開催されていた労働英雄大会は、1949年以降は切り離され、それぞれに大規模な政治イベントとなる。1950年代、北京のソ連展覧館（現、北京展覧館）、上海の中ソ友好大厦（現、上海展覧中心）や工人文化宮で幾度も開催された様子は連日、『人民日報』や『文匯報』に掲載された。建国まもない人民中国では共産党政権の基盤を固めるため、国共内戦の勝利や土地改革の妥当性、農業・工業の発展などを博覧会において視覚的に示す必要があったためである〔泉谷2010〕。

人民中国最初の労働英雄の表彰式は、最初の国慶節である1950年10月1日にあわせて開催された。それに先立って7月、中央人民政府政務院は《全国戦闘英雄代表会議および全国工農兵労働模範代表会議の開催決定に関して》を通して、解放戦争で活躍した戦闘英雄と模範的労働者を表彰することを公布した。9月25日、2つの会議の開幕式が北京の中南海懐仁堂で行われ、全国戦闘英雄の代表360人、全国工農兵労働模範の代表462人、国民党軍起義部隊（国民党から共産党へ寝返った部隊）の代表64人が参列した。毛沢

東は祝辞の中で、全中華人民の模範人物である英雄模範は、各方面の人民事業を勝利に導く中核であることを強調した。祝宴に招かれた英雄模範は天安門の観閲台上に上り、国慶節式典の様子を眺めた。

1956年にはメーデーのイベントとして4月30日から5月10日まで全国先進生産者代表会議が開かれた。国務院は全国先進集体の称号を853団体に与え、4703人に全国先進生産者の称号を付与した。1959年10月25日から11月8日には北京で全国群英会(先進工作者・労働模範などの集まり)が開かれた。この会に参加したのが、1959年9月に全国労働模範に選ばれた王進喜であった。群英会の期間中、黒龍江省で油田が発見されたことを知った王進喜は、油田開発に赴くことを石油部の幹部に要求した。1960年3月、王進喜は玉門から大慶へ向かった。1205掘削隊の隊長となった王進喜は大慶油田の開発に成功し、1964年12月、第3回全国人民代表大会に出席した。さらに1969年4月、中国共産党第9回全国代表大会にて、中国共産党中央委員会委員に選出された。1970年11月15日、胃ガンのため北京の病院で没する。

1964年1月25日、『人民日報』に「工業は大慶に学べ」というスローガンが掲載されると、その後の新聞には「大慶精神」や「王鉄人」という文字が頻繁に登場した。1965年12月8日の『工人日報』(中華全国総工会の機関紙)には以下のような記事が掲載された。

多くの人びとは大慶の革新は多く、成果も大きく、立派であるという。大慶はなぜ立派なのか?その根本は常に偉大なる毛沢東思想を高く掲げているからであり、常に毛主席の著作を堅実の学び活用し、絶え間なく階級教育を行い、多くの労働者の階級意識を大いに高め、人民に奉仕するという革命人生観をだんだんと樹立するからである。彼らはまさに人民に奉仕するという革命人生観を持つために、各人を革新させ雑念が減るのである。彼らは革命を革新するためではなく、自覚的に技術革新と技術革命を、社会主義建設と社会主義革命の遙かなる目標と、そして、反帝国主





字から成る読み物で、20世紀初頭の中国で誕生し、1920年代、上海の世界書局が『三国志』や『水滸』などの古典が10cm程度の冊子として刊行された。人民中国成立後、法律の公布や識字率の向上のため積極的にプロパガンダとして利用された。連環画のテーマは多岐にわたるが、自らの命を犠牲にした人物が模範的な英雄としてその連環画が大量に供給された〔武田2017〕。王進喜の連環画は1973年に『鉄人』として刊行された。

1 大慶油田の王鉄人は無産階級革命を胸に抱いた人物であり、革命事業のためにはどんな危険も恐れずに成し遂げる人物である。彼は帝国主義と修正主義、一切の反動派を恨み、労働においては天と戦い地と戦い、錯誤思想と戦い、苦勞を恐れず、死を恐れず、一生涯、「地道に働く人」(老黄牛)であろうとし、労働者階級の英雄の気概を充分に表現する人物である。

2 王鉄人の人生は甘肅省玉門の貧しい家から始まる。5歳から6歳のころ、両目を失明した父親と一緒に街角で物乞いをし、後に地主の牛飼いとなった。腹が減ったら米ぬかや野菜を食べ、寒くなったら牛とともに暖を取った。幼いころからひどく貧しい生活を送ってきた。

5 1956年、王鉄人の掘削隊は当時の全国最高掘削記録を更新した。1958年にはさらに5000メートル進み、20000メートルを記録し、「掘削衛星」「掘削模範隊」の榮譽ある称号を得て、全国の石油労働者の手本となった。

15 掘削機がようやく届いた。掘削機は7つの車両に積まれてきたが、それを吊るす機材はない。どうするか？ 王鉄人は人の肩に載せて引っ張る方法を提案し、掘削機を乗せて油を取り出した。彼はさらに「条件がある場合は進み、条件がない場合でも条件を作り出して進まなければならない」(有条件也上、没有条件創造条件也要上)というスローガンを述べた。

28 ある日、鉄人が油井の近くに座っていると、突然、油井から噴出する現象が起こった。鉄人は普段から脚を痛めていたが、危機の瞬間には杖をつきながらも飛ぶかのように駆けつけた。

29 これは大事件であった。油井の噴出を抑えることができなければ、数十メートルの油井やぐらが倒れてしまう。鉄人は皆を集めて相談した。当時の油田には暴噴を抑えるためのバライト（重晶石）がなかったため、セメントと砂を用いることが提案された。

30 セメントと砂を泥水の中に入れたが、当時、攪拌機がなかったため、鉄人は杖を後ろに放り投げて泥水に飛び込んだ。戴祝文と周正栄も続いて飛び込んだ。腕でシェベルを使って攪拌し、とうとう油井の噴出を抑制できた。しかし、鉄人の体にはやけどで無数の水疱ができた。

15の攪拌機を人の肩で運ぶという出来事と、泥水に飛び込んでセメントを攪拌するという出来事は、28から30は王進喜に関する逸話の中で最も有名なものである。

この時期、中間人物論批判が展開され、英雄的な人物の描き方が極端に画一化してゆく。中間人物論とは、1962年8月に中国作家協会が開いた「農村を題材とする短編小説座談会」において作家協会副主席であった邵荃麟（1906-1971）が茅盾（1896-1981）の「両端は小さく、中間は大きい」という言葉を引用しながら、中間にいて矛盾を抱える農民を写實的に描くことを提唱したものである。これは大きな批判を招くこととなり、邵荃麟は文化大革命中、獄中で病死する。中間人物のような曖昧な英雄は不要であり、労働者にとって必要なのは雷鋒のような毛沢東思想を努力して学ぶ英雄であることが幾度も新聞に掲載された〔工人日報1965年12月30日〕。

雷鋒（1940-1962）は、王進喜と並ぶ模範的な英雄である。湖南省長沙市

望城県の貧しい農家に生まれた雷鋒の父親は1949年の解放後、湖南省安慶郷人民政府によって無料で小学校に入り、その後、農場や工場でトラクターやブルドーザーの運転手として働く。人民解放軍瀋陽部隊に入隊すると、自動車兵に配置されると、「良い兵士」と称されるが、1962年8月15日、作業中に撫順で殉職する。死後、毛沢東らの党の指導者の言葉を引用した日記が発見されたことから、彼の模範としての重要性は格段に高まり、1965年の毛沢東による「雷鋒に学ぼう」というスローガンを通して、雷鋒は模範的な人物として全国にその名をとどろかせた。

模範的な英雄に求められたのは国家と党への献身度である。こうした新しい英雄は、ブルジョワなどの「古い人間」に対するものとして「新しい人間」と呼ばれ、全体主義体制下で様々な形でスタハーノフのようにプロパガンダに利用された。このような新しい人間を英雄的に表現する技法が社会主義リアリズムであった。

新しい人間の概念においても、表現技法においても労働模範顕彰制度はスタハーノフ運動と類似しているが、いくつかの点で違いが生じた。Yuは3つの側面からその違いを説明した。

第一は、スタハーノフ運動が生産性向上のため新しい技術と密接に結びついていたのに対して、失業者が多かった当時の中国では技術革新による合理化よりも失業率低下を目的に掲げた。第二には、ソ連では成果達成による賃金上昇が労働者たちのインセンティブとなっていたが、中国では延安時代に与えられていた労働英雄に対する報奨金は次第に減少し、1949年以降は賃金目当ての労働は共産主義の理念に反するものとされ、政治運動と改革による生産性向上が重視された。第三は、ソ連では労働者の識字率および文化水準の向上を図るため、文学作品や演劇の鑑賞、美術館訪問の訪問など、ブルジョワ的な文化が労働者に推奨されたが、ブルジョワ的な文化が批判の対象となっていた中国では、労働者が学ぶべきものは実践に則した知識とされ、農民の文化水準向上は主要な目的とはならなかった [Yu 2010:244-248]。

こうした国家および党のために犠牲になった人物は社会主義的男性性

(revolutionary masculinity) を具現化するものであるが、社会主義への献身的な態度を過剰に強調する理由は、中国がアヘン戦争以来、半植民地化されたという恥辱の経験を消し去るためのものであるという [Hinsch 2013:152]。

男性性を強調する労働模範の強靱な身体は、やがて、過酷な労働に耐える姿として博物館や記念館において展示されるが、それだけではなく、社会主義イデオロギーを具体化する労働模範は、毛沢東思想を学ぶ主体という役目も担うことになる。

### 3. 記念館の中の労働模範

鉄人王進喜記念館は、中国初の労働者のための記念館である。1971年に建設されたときには鉄人王進喜同志英雄事迹陳列館という名称であったが、1975年、展示室を拡大して鉄人王進喜同志英雄事迹展覽館となった。1991年、さらに改修されて鉄人王進喜記念館となり、2006年9月26日、大慶油田の発見47年を記念して新館が竣工した。新館は、高さ47メートルの外観で「工人」の文字を組み合わせた形を持つ【写真1】。また、正面の47段の階段は王進喜の47年の生涯を表す。親しみやすい存在として王進喜を見せるため、新館の展示には王進喜自身の語りや王進喜に関するインタビュー映像を取り入れた [許俊徳 2016; 郭程 2019]。

中国ではこうした特定の出来事や人物に特化した博物館を記念館という。博物館の一種に分類されるが、「紅色文化」(社会主義革命文化)を具現化し、宣伝することが求められている。1985年1月9日に公布された「革命記念館工作試行条例」(2016年8月25日廃止)の第二条には、革命記念館の任務は、マルク



写真1 大慶鉄人王進喜記念館



写真2 国家博物館



写真3 淮海戦役記念館

スレーニン主義・毛沢東思想を以て指導し、人民に奉仕し、社会主義に奉仕する方向を堅持し、青少年に唯物主義・愛国主義・革命伝統を学ばせ、共産主義と道徳の水準を高めるものであるという内容が記されている。こうしたイデオロギー性の強い展示施設は、旧ソ連や東欧諸国の旧社会主義国において建てられてきた。

博物館は一般的に総合博物館と歴史や自然、美術などの専門博物館に分けられるが、中国では1949年以来、総合博物館、専門博物館、記念館という3分類を持つ。記念館の特徴は、第一に臨場感である。辛亥革命記念館や南昌八一起義記念館のように歴史的に重要な出来事が起こった場所や、韶山毛沢東同志記念館や彭徳懐記念館など重要な人物の生家が記念館となる。第二には、ある人物が使用したモノを展示品とすることで、特定の記憶を引き起こすことである。第三は、テーマの明確さである。孫文記念館や魯迅記念館はそれぞれ孫文、魯迅の一生を展示する施設である〔蘇東海 2010:119-121〕。

総合博物館と革命記念館は建物の構造および展示方法において違いが見られる。一般的に総合博物館は入口に開放的なホールと中央階段を持ち【写真2】、参観者はどの展示室へも自由にアクセスできるようになっている。一方、記念館の入口には記念館のテーマを明確に示す大型のレリーフや銅像が置かれる【写真3】。この場所でしばしば用いられるのが、カラーのパノラマにモノクロの銅像という組合せである【写真4】。総合博物館では参観



写真4 平津戦役記念館



写真5 辛亥革命記念館

ルートが定められていないが、革命記念館は一方向に進むことが期待される。多くの革命記念館はアヘン戦争以降の「国恥」の歴史が示され【図4】、その記念館の主要なテーマとなる箇所で大規模のジオラマやパノラマが用いられる【写真5】。

鉄人王進喜記念館もこの様式に則って、王進喜の一生というストーリーと、それを「大慶精神」として社会主義イデオロギーに収斂させる方法が用いられている。展示は9つのテーマからなる。最初に入館ホール《石油

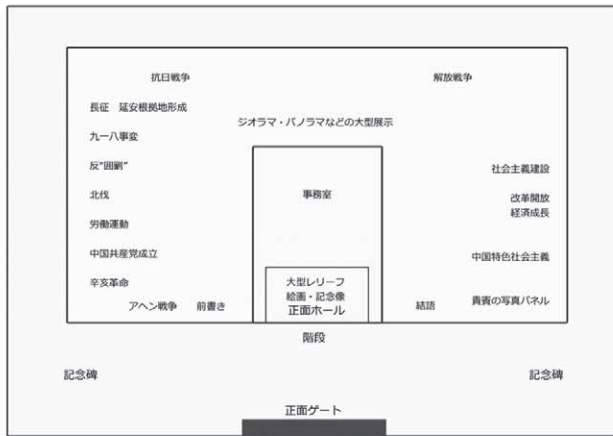


図4 記念館モデル



写真6 《石油魂》

魂》【写真6】という大型のレリーフがあり、幼少時代が「不屈の少年」というテーマで生家の復元模型で示される。続いて「誠実で国に尽くす」、「艱難辛苦」というテーマで、中国最初の石油掘削作業員となり全国労働模範となるまでが描かれる。ジオラマ《大慶油田会戦》(大慶油田の開発)、パノラマ《人拉肩

扛》(肩に載せて運ぶ)、パノラマ《破冰端水保開鑽》(氷を破り水を取り除いて掘削する)などの展示を通して、王進喜が1205掘削隊を率いて油田を開拓し、鉄人と呼ばれるまでの過程が展示される。

続いて「科学の追求」と「貢献を後悔しない」、「献身的に尽くす」というテーマで掘削技術を刷新し大慶油田を発展させたものの、文革期に迫害を受けても凜然と立ち向かい、命の危険も顧みず大慶油田を守りぬいた王進喜が描かれる。ここにはジオラマ《鉄人辨学》(鉄人、学校を運営する)【写真7】、ジオラマ《跑井》(油井へ赴く)、ジオラマ《親愛》【写真8】、鉄人の家の復元模型などがある。最後は「精神は永遠に存在する」と「永遠の鉄人」というテーマで王進喜の死後、多くの党幹部がその精神を受け継ぐというパ



写真7 《鉄人学校を經營する》



写真8 《親愛》



ネル展示、王進喜の半身像で終わる。

大慶油田の開発に尽力した一方で、労働者たちの識字率の低さを危惧した王進喜は学校を設立した。「一つの字を学ぶのは山を動かすようなものだ」という言葉を述べたように自らも文字の修得に苦労しながらも、『毛沢東選集』を読んで「兩



写真9 《焚火を囲んで兩論を学ぶ》

論」(実践論と矛盾論)を学んだことが語られる【写真9】。油田開発を描いた映画『創業』にもこの場面が登場する【図5】。映画のクライマックスは主人公・周挺杉(モデルは王進喜)が泥水に飛び込んでセメントを攪拌する場面であるが、そこでは「石油労働者が大声で叫べば地球も何度も揺れる」という王進喜の言葉を用いた歌が流れる。『創業』は1975年春節に一度公開されたものの、四人組によって半月で上映中止となった。脚本家の張天民(1933-2002)が毛沢東に手紙を出して上映再開を訴えた結果、再び、上映されることになった。なお、1966年に完成した記録映画『大慶戦歌』も四人



図5 映画『創業』

組の干渉に遭い、公開されたのは1977年であった。

周恩来と語らう《親愛》というジオラマは、1959年10月に王進喜が初めて周恩来に会ってから1970年に死去するまで30回、会見したという二人の親密さを表している。この場面はドラマ『五星紅旗迎風颯揚2』(2012年)でも幾度も見られる【図6】。ドラマの前半はロケット科学者の銭学森(1911-2009)を中心として1964年代の原爆実験の成功までが描かれ、後半は鄧小平の復活と改革開放路線の始まりが描かれる。ドラマの12話では1964年の毛沢東71歳の誕生日の祝賀会に、労働模範の代表として王進喜と銭学森が招かれる場面がある【図7】。

このように映画やドラマ、絵画、ポスターの描写と記念館の展示は相互



図6 ドラマ『五星紅旗迎風颯揚2』



図7 ドラマ『五星紅旗迎風颯揚2』

に影響しあっていることがわかる。そもそも、王進喜の写真はあるものの、1960年代の大慶油田開発時の様子はほとんど映像には残っていない。現在のドキュメンタリー番組で目にするのは『創業』や『大慶戦歌』などの映像であり、それらも当時の新聞に掲載された絵やプロパガンダポスターを基づく。さらに、2009年公開の『鉄人』や記念館の展示はこれらの映画を参考にしている。その際、モノクロの銅像とカラーの背景は、1960年代の雰囲気よりもホンモノらしく見せる効果がある。現代の技術では人物を精巧なマネキンで作ることも可能であるが、より写実的なマネキンを使うほど、リアリティが損なわれるという結果をもたらす。

妙木がマダム・タッソー蠟人形館の事例で述べたように、歴史上の人物の精巧なマネキンは歴史的なリアリズムの復元であるが、有名な同時代の人物のマネキンは「娯楽」として消費されるのである [妙木 2017:174-175]。労働模範の身体は「娯楽」として消費されるべきではなく、実際に社会主義の建設時代を生きた人物として学習すべきものである。実際に存在したことと、それをドラマティックに描く手法として、モノクロの銅像とカラーの背景という組合せが使われていると考えられる。そして、人民中国成立以来、各地に偉人や英雄の銅像が建てられてきた中国では、銅像とは実在した偉い人物であるという記憶が刷り込まれている。それは建物の中にあっても同じであり、銅像の背景は見る者にその人物に関するより多くの情報を与えるのである。

## おわりに

社会主義国の映像において銅像は、二次的な役割を持つ。映画のオープニングにおいてソ連のモスフィルムでは「労働者と女性コルホーズ」の像が使われ、北朝鮮の映画では千里馬の像が使われる。『創業』では王進喜の像が登場し【図8】、『鉄人』では王進喜記念館の「石油魂」が使われる。

このように銅像そのものが社会主義時代の労働英雄を思い起こさせる例と



図8 映画『創業』

して、ポーランド映画『大理石の男』(1977年)が挙げられる。労働者ビルクートの彫像を通して工場建設や農業集団化など社会主義建設が象徴的に描かれた[菅原2017]。旧ユーゴスラビアでは1949年、ボスニアの炭鉱夫アリヤ・シロタノヴィッチ(1914-1990)が「スタハーノフ越え」をしたことが強調され、英雄として祭り上げられていった[亀田2014]。

モノクロの銅像は、ときとして、モノクロ映像と同様に既視感を抱かせる。英模映画(英模片、英模電影)は『張思德』(2004年)は最初と最後のみがカラーで1940年代の場面はモノクロで映される【図9】。この手法は『五星紅旗迎風颯揚2』などの現代ドラマにも用いられている。場面の切り



図9 映画『張思德』

替わりでモノクロからカラーとなることで、出来事のリアリティを醸し出す効果を持つ。TVドラマ『解放』（2009年）では、実際の映像とドラマの映像をつなげるためにモノクロ映像が使われ、ドラマであるにも関わらずドキュメンタリーを見ているような錯覚を与えるのである。

『鉄人』や『張思徳』など英雄を題材とした英模映画は、年配者にとって社会主義時代を思い起こさせるある種のノスタルジックなものという側面がある。グローバル化に伴い急速に社会が変化する中で、旧社会主義国では社会主義ノスタルジアが沸き起り、社会主義時代に作られたものがそれを喚起させるものとなっている [高山 2019]。映像でいえば、それは労働英雄の身体を通して、物理的には辛い生活だったとしても精神的には充実感があつたという社会主義の記憶をよみがえらせ、その中には国家建設を担ってきたという社会主義的男性性への自尊心も含まれるのである。

ただし、最後に付け加えるならば、こうした英模映画に対しては否定的な意見も少なくない。都市部に多くのシネコンが並び、ハリウッド大作映画が上映される現代では、英模映画は時代錯誤であると批判される。さらに、他の国産映画が外国映画と対抗しながら制作を続けているのに対して、英模映画だけが政府の補助金を受けるといった特別措置への不満は膨らむ一方である。英模映画の特殊性は2013年の「零票房」（ゼロチケット売り場）事件によって如実に表される。2013年3月5日の映画『青春雷鋒』公開日、誰もチケットを買いに来なかったという事件である。このニュースはインターネット上で即座に拡散したが、映画製作サイドはこれをフェイクニュースとして批判した。『青春雷鋒』の内容については、「洗脳」や「虚構」などの単語がインターネット上に並んだ [沙丹 2011；石栄・何祖健 2014；何祖健 2015 など]。

こうしたギャップは、SNS世代にとってのリアリティと社会主義経験者にとってのリアリティの違いを浮き彫りにしている。SNSを通じたつながりを重視する世代には、かつての労働模範が醸し出していた熱気のようなものは実感しにくいのだといえる。

## 参考文献

泉谷陽子

2010「中華人民共和国・社会主義路線期：毛沢東時代の博覧会」柴田哲雄・やまだあつし(編著)『中国と博覧会：中国2010年上海万国博覧会に至る道』成文堂、37-60ページ。

今堀誠二

1971「抗日戦争期における辺区の動向と現実：労働英雄の記録の分析」『アジア経済』12(8)、2-27ページ。

何祖健

2015「“文化例外”視域中的英模電影二級市場研究」『北京電影学院学報』2015年第6期、29-33ページ。

郭程

2019「浅析口述史方法在近現代人物紀念館中的作用：以鉄人王進喜紀念館為例」『大慶社会科学』総第212期第1期、148-151ページ。

亀田真澄

2014『国家建設のイコノグラフィー：ソ連とユーゴの5ヵ年計画プロパガンダ』成文社

許俊徳

2016「紀念館陳列主題立体化表達敵實現実途徑：以大慶鉄人王進喜紀念館“五講”手迹展示」『中国紀念館研究』2016年第1輯、94-100ページ。

小島朋之

1999『現代中国の政治：その理論と実践』慶應義塾大学出版会

ゴロムシトク、イーゴリ

2007『全体主義芸術』水声社

沙丹

2011「国家制造：英模題材作品的新趨勢」『電影芸術』2011年第4期、57-59ページ。

佐藤宏

1984「陝甘寧辺区の農村労働英雄と基層指導部：延安期の大衆路線」『中国研究月報』432、2-21ページ。

菅原祥

2018『ユートピアの記憶と今：映画・都市・ポスト社会主義』京都大学学術出版会

石栄・何祖健

2014「從《青春雷鋒》事件看英模電影的市場困境」『中国電影市場』2014年第2期、20-22ページ。

蘇東海

2010「紀念館專業委員會会刊《中国紀念館》代表刊詞」『博物館的沈思想 蘇東海論文選（卷三）』文物出版社、116-118 ページ。

宋維才

2008「“英模電影”路在何方？」『電影芸術』2008年第一期、52-54 ページ。

孫雲

2012「中共英模表彰制度的肇始及演變」『党的文献』2013年第三期、71-76. 82 ページ。

高嶋航

2018「近代中国の男性性」小浜正子他（編）『中国ジェンダー史研究入門』京都大学出版会、259-279 ページ。

高山陽子

2019「紅い戦争のメモリースケープ：ソ連・東欧・中国・ベトナム」越野剛・高山陽子（編著）『紅い戦争のメモリースケープ：ソ連・東欧・中国・ベトナム』北海道大学出版会、1-20 ページ。

武田雅哉

2017『中国のマンガ＜連環画＞の世界』平凡社

富田武

1996『スターリニズムの統治構造』岩波書店

藤原裕子

2004「中国模範村基層幹部考察：大寨と陳永貴を事例に」『異文化コミュニケーション論集』2、95-105 ページ。

2008「労働英雄運動の誕生と展開：吳満有運動を例に」『中国研究論叢』8、87-115 ページ。

2012「現代中国の模範村の行方：「農業は大寨に学べ」の軌跡」『異文化コミュニケーション論集』10、73-95 ページ。

妙木忍

2017「観光化する身体：マダム・タッソーの蠟人形館をめぐる」田中雅一（編）『侵犯する身体：フェティシズム研究3』京都大学学術出版会、167-191 ページ。

毛沢東

1971『毛沢東集第2版第9巻』蒼蒼社

Cheng, Yinghong

2009 *Creating the “New Man”: From Enlightenment Ideals to Socialist Realities*, University of Hawai'i Press.

Hinsch, Bret

2013 *Masculinities in Chinese History*, Rowman & Littlefield.

Pang, Laikwan

2017 *The Art of Cloning: Creative Production during China's Cultural Revolution*, Verso.

Yu, Min-ling

2010 "‘Labor Is Glorious’: Model Laborers in the PRC." Thomas P. Bernstein and Hua-Yu Li (eds.) *China Learns from the Soviet Union, 1949-Present*, Lexington Books, 231-258.

## 新聞

「斯塔哈諾夫運動五週年記念 工業生產不斷增加」『新華日報華北版』1940年11月23日

「生產展覽會第五六兩日 勞動英雄榮受獎品 舉行工業・金融座談會」『新華日報華北版』1940年9月29日

「兩大盛會今日開幕」『解放日報』1943年11月26日

「兩大盛會昨日隆重開幕」『解放日報』1943年11月27日

「迎接全國先進生產者代表會議」『人民日報』1956年4月28日

「大慶精神 大慶人」『人民日報』1964年4月20日

「社論 學習大慶精神 為革命而革新」『工人日報』1965年12月8日

「大慶精神進廠 工廠面貌大變」『工人日報』1965年12月29日

「大寫英雄人物、為興無減資而鬭爭」『工人日報』1965年12月30日

「社論 有條件要上 沒有條件創造條件也要上」『工人日報』1966年1月16日

「光輝的形象 英雄的事跡：王鉄人的故事」『工人日報』1966年1月24日